

海外農業開発

MONTHLY BULLETIN OVERSEAS AGRICULTURAL DEVELOPMENT NEWS

2004 7

社団法人 海外農業開発協会

マクロにとらえる。

1 清浄(せいじょう)
 2 空虚(くうきょ)
 3 六徳(りつとく)
 4 刹那(せつな)
 5 弾指(だんし)
 6 瞬息(しゆんそく)
 7 須臾(しゆゆ)
 8 逡巡(しゆんじゆん)
 9 模糊(もこ)
 10 漠(ばく)
 11 渺(びょう)
 12 埃(あい)
 13 塵(じん)
 14 沙(しゃ)
 15 織(せん)
 16 微(び)
 17 忽(こつ)
 18 糸(し)
 19 毛(もう)
 20 厘(りん)
 21 分(ぶ)



1 (いち) 一
 2 (じゅう) 十
 3 (ひゃく) 百
 4 (せん) 千
 5 (まん) 万
 6 (おく) 億
 7 (ちよう) 兆
 8 (けい) 京
 9 (がい) 垓
 10 (じよ) 杼
 11 (じよう) 穰
 12 (こう) 溝
 13 (かん) 澗
 14 (せい) 正
 15 (さい) 載
 16 (ごく) 極

(ごうがしゃ) 恒河沙
 (あそうぎ) 阿僧祇
 (なゆた) 那由他
 (ふかしぎ) 不可思議
 (むりようたいすう) 無量大数

ミクロにこだわる。

たとえば地球上の小さな生命をじっと見守るミクロの視点で。たとえば壮大な宇宙をイメージするマクロな発想で。清水建設はいつもそんなふうに自由な着眼点を大切にしながら、豊かな明日を考えています。

人がつくる、人の場所。
 SHIMIZU CORPORATION
清水建設

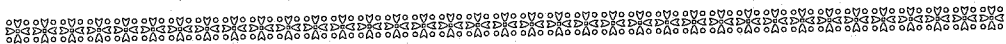
<http://www.shimz.co.jp/>

目 次

2004-7

パキスタンの野菜撮り歩き記..... 1

「海外農林業開発協力促進事業」制度のご案内..... 11



パキスタンの野菜撮り歩き記

元野菜試験場育種部 芦澤正和



同国の自然条件は北部・西部の山岳地帯から南部・東部の低地・砂漠まで高低・乾湿とも多岐にわたる環境下にある。

筆者が撮り歩いた写真にもそれが反映されている。

(1) 国の沿革

戦前の英領インドが戦後、ヒンズー圏のインドとイスラム圏のパキスタン（インドを挟んで東パキスタンと西パキスタン）として独立した。その後東と西の抗争が起り、東はバングラデシュ、西はパキスタンとして分離・独立することになった。

パキスタンの正式国名はパキスタン・イスラム共和国で、国民の97%がイスラム教徒である。PAKISTANの由来はこの国を構成するパンジャブのP、アフガニスタン（北西辺境州）のA、カシミール、K、シンドのS、バルチスタンのSTANを組み合わせたもので、‘清浄な国’を意味するものという。

1) パキスタンの位置と国土

パキスタンは北緯 $23^{\circ}30'$ （石垣島付近）～ $36^{\circ}45'$ （仙台付近）、東経 61° ～ $75^{\circ}31'$ の範囲にある。南はアラビア海を経てインド洋に面し、東はインド、東北はジャム・カシミール（インドとの国境不確定地域）、北は中国（狭い回廊を経てタジキスタン）、北西・西はアフガニスタン、南西はイランと国境を接している（上図参照）。総面積は日本の約2倍にあたる79万6,095km²、人口は日本とほぼ同じの約1億2,000万人である。

古代文明の栄えたところで、国土の中央を貫流するインダス川南部にはモヘンジョダロ遺跡が、北部にはガンダーラ・タキシーラ遺跡（写真1）がある。

かつては大乗仏教の源泉であるガンダーラ仏教文化が栄えたが、8世紀に入ってイスラム教が伝えられ、その後完全なイスラム教圏となった。現在は政治を含む国民生活のすべてに亘ってイスラム教が決定的役割を果たしている。

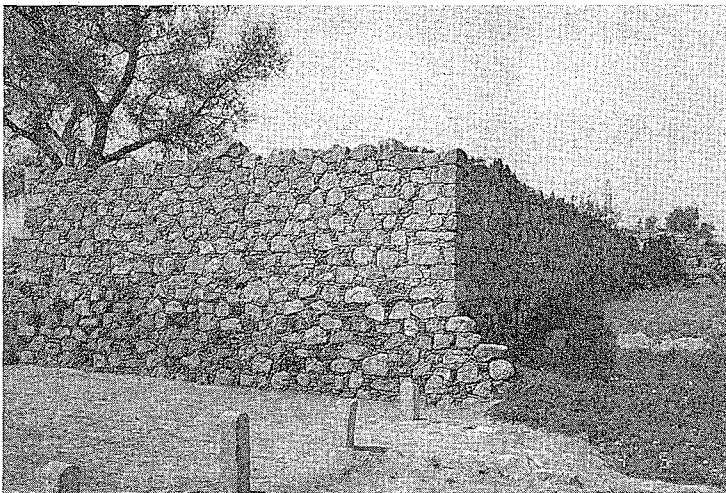


写真1 ガンダーラ・タキシーラ遺跡

2) パキスタンの地勢

全体として北部・西部・南西部に向かって高く、東部・南東部が低くなっている。北部・北西部にはカラコルム、ヒンズクシー山脈などの7,000～8,000m級の山々が連なり、中国・アフガニスタンとの国境には何重もの山脈がある。中国との間には標高4,943mのフンジャラブ峠が、アフガニスタンとの間には少数民族の自主管理地帯となっているハイバル峠がある。これらの地域はパキスタンのAに当たる北西辺境州（アフガニスタン）である。この北東部にKに当たるカシミールがあるが、インドとの紛争地帯で、ノーザン・エリアとして国の直轄地になっている。

インダス川が北部の山岳地帯から流れ出て、国のほぼ中央を貫流しており、それに多くの河川が合流して南部でデルタ地帯を形成しながら、アラビア海に注いでいる。この川の沿岸地帯がパキスタンの豊かな農業地帯になっている。インダス川中流域がパキスタンのPに当たるパンジャブ州で、この国の中核を成している。（写真2）。インドとの国境をなす東部・南東部には広大なタール砂漠がある（写真3）。

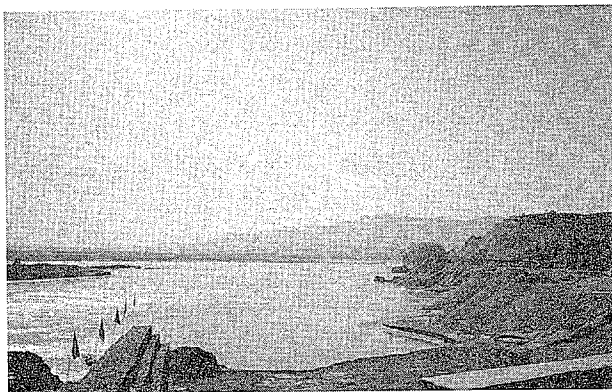


写真2 インダス川中流域

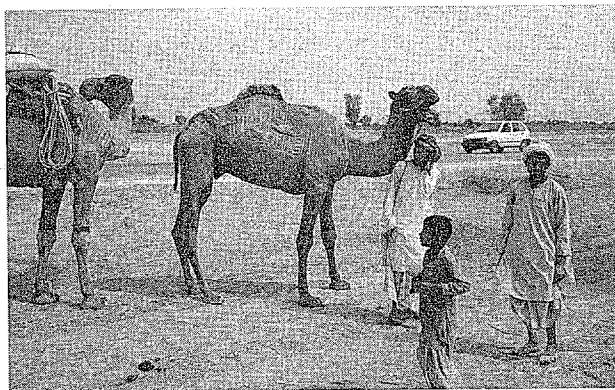


写真3 タール砂漠のラクダ

インダス川の下流は川幅が広くなり、最下流地帯では多数に分岐し、先述の通り扇状地帯を形成する。ここがパキスタンのSIに当たるシンド州で、この国のもう一つの核であり、パンジャブとは対立関係にある。ここの州都カラチにはパキスタンの建国の父とされるジンナーの廟がある（写真4）。ジンナーはインドのガンジーに匹敵する役割を果たしていた。パキスタンの首都がイスラマバードに建設されるまではカラチが首都であった。

西よりを縦走るスラレマン山脈以西（写真5）・バルチスタン州の大半はパキスタンの後進地帯で、封建的な大地主が広大な土地を支配し、地主たちの間には今ではパキスタンでも珍しくなった一夫多妻制が残っているという。ここがパキスタンのSTANに当たる。

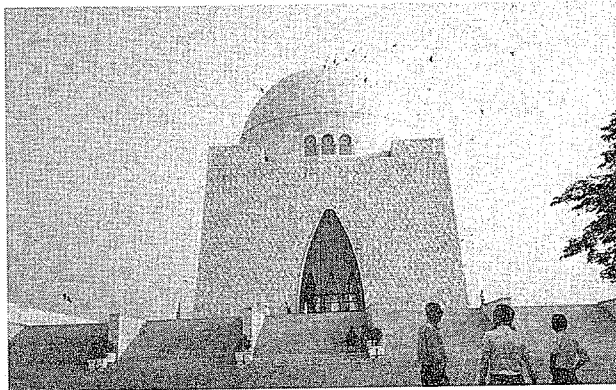


写真4 カラチのジンナー廟

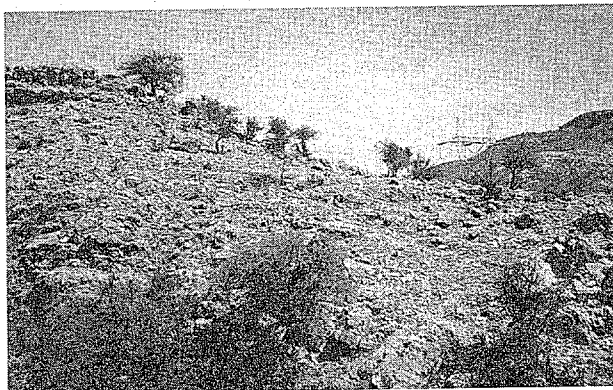


写真5 スラレマン山脈の東麓

3) 国内の気候

国は全体としては亜熱帯圏に属するが、内陸部は大陸性気候で、温度格差が大きい。南部はバナナ、パパイヤ、マンゴーが栽培される熱帯性気候であり、北部はリンゴが栽培可能な冷温帯性気候となり、北部高原は冷涼地帯であり、山岳地帯には万年雪・氷河のある高山が連なる。

降水量は北部で多く、2,000mmに達する。南部にゆくにしたがって降水量は減り、南東部のタール砂漠は降水量100mm以下の極乾燥地帯である。インダス川中・下流の穀倉地帯は降雨量が500mm以下の乾燥地帯で、灌漑網の整備が生産の基礎となっている。

(2) パキスタンの農業・野菜

先述の通りパキスタンは南北に長く、南はバナナ、パパイヤの栽培される亜熱帯圏に属し、中部はコムギの大産地である温帯圏であり、北部はリンゴを産する温帯冷涼地である。そして、耕種農業のできない高山地帯に続き、最北部には草木すら生えない高山が聳えている。インダス川の中・下流地域は現在コムギの大産地になっている。英領インドとなる前は河川の氾濫地帯であったが、英国が河川の氾濫防止・灌漑体系の徹底的整備に努め、肥沃な畑にすることに成功した。基本的には乾燥地帯であったインダス川中・下流地域が肥沃な、生産性の高い農地となった。地域ごとに水の管理所と、その仕事に携わった英国人専門家や農業技術者の宿舎・厚生施設が整備されている。しかし、最近その負の遺産として灌漑地域全体にわたって塩積が起り、耕作放棄を含む大きな問題となっている。

1) 農作物の根元観

コムギは国民の主食の一つであるナン（写真6）の原料であり、自給できるのみでなく、重要な輸出品の一つでもある。綿も広く栽培され、国内工業の原料であるとともに、これも重要な輸出品である。このほかトウモロコシの栽培も多い。パキスタンの重要な油料作物であるエルカ（キバナズシロ）はパンジャブ州のインダス川流域地帯に広く栽培されている。エルカの若い葉は野菜用にもされ、最近日本でもルッコラ（イタリア語起源といわれているが、英語ではロケット・サラダ）の名で売られている。

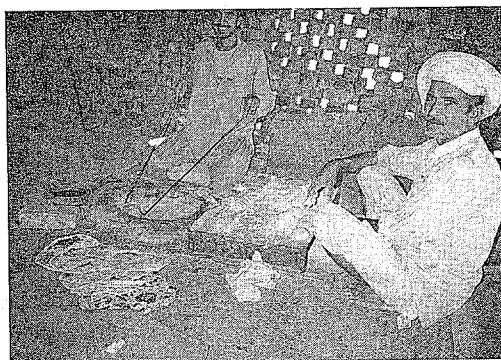


写真6 国民の主食“ナン”

2) 家畜の根元観

イスラム教圏であるのでブタの飼養は皆無に近い。首都イスラマバードで中華料理のパーティーに出席したことがあるが、料理に出てくる肉は当然のことながらブタは無し、ウシ・ヒツジ、トリ、魚、そして野菜と料理の種類は多様でもなんとなく間の抜けた感じ。おまけに公式のパーティーなのでアルコール類も皆無、ちょっと面食らったし、間が持たなくて困った。家畜の中心はウシ（肉用・乳用）、ヒツジ、それに混じって少数のヤギ、ウマとロバ、砂漠地帯ではラクダが飼育されている。家禽（卵用、肉用）の飼養も多い。

3) 果物の根元観

国土が亜熱帯圏から温帯寒地にわたり、さらに高冷地もあるため果物の種類は豊富である。バナナ、ヤシの実、マンゴー、パパイヤなど熱帯・亜熱帯圏のもの、オレンジ、マンダリンなどの温帯暖地のもの、モモ、スモモ、アンズ、リンゴなどの温帯中温・寒地のものなど極めて多様である。(写真7、8)。

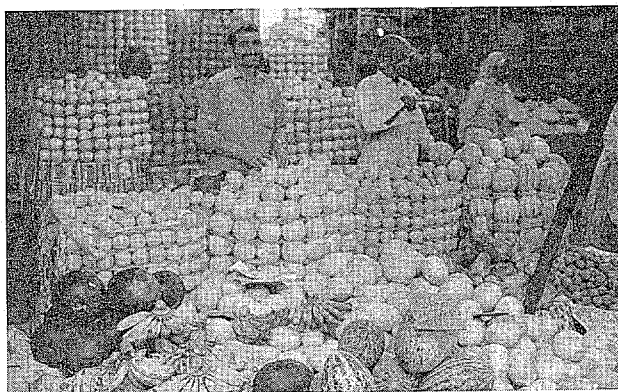


写真7 果物屋の店頭



写真8 飾りとしてホテルのレストランに並ぶ

(2) 野菜の根元観

1) 東西南北・高低の接点の野菜

パキスタンは一応西南アジアにあるが、その位置から中近東・中央アジア、そして中国（新疆・ウイグル地区）、インドとも接している。また、かつてイギリスの植民地であり、ヨーロッパの影響もかなりうけている。一方国土は北部・西部の山岳地帯から、南部・東部の低地・砂漠まで高低・乾湿が多岐にわたる。したがってそこに栽培される野菜の種類・品種も多様で、東西南北・高低地帯の種々多様なものが見られる。

2) ヨーロッパ型とアジア型の野菜

市場に行くと多くの野菜でヨーロッパ型とアジア型のものが同時に見られる。ダイコンとラディッシュ、橙色のニンジンと赤色のニンジンはどこにもある（写真9、10、11、12）。メロンの種類も多様で、ヨーロッパ型・小アジア型・中央アジア型などが同じ所に並んでいる（写真13、14、15）。

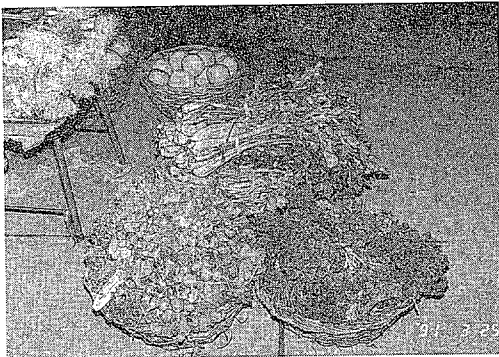


写真9 ヨーロッパ型野菜 セルリー・パセリ・ラディッシュ



写真10 アジア型の野菜 ダイコン

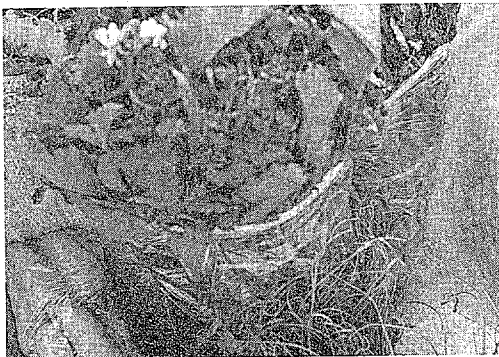


写真11 ヨーロッパ型 ニンジン
白花は地中海型キャベツ（不結球）

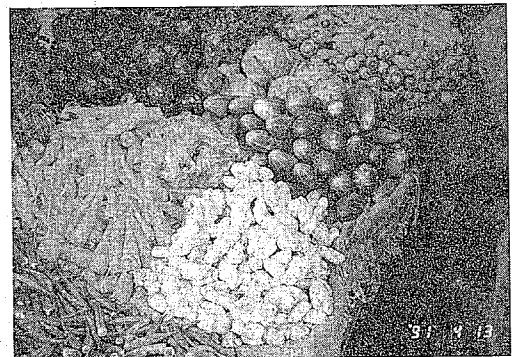


写真12 アジア型 ニンジン キュウリはヨーロッパ型
ナスも帯（へた）の青いヨーロッパ型

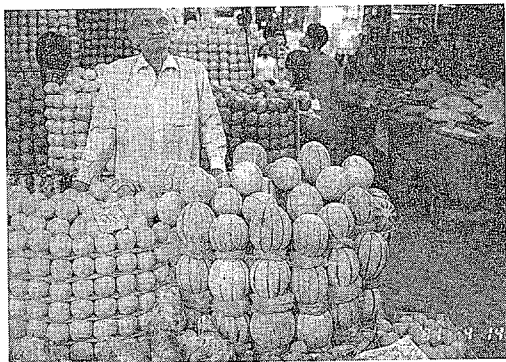


写真13 ヨーロッパ型 メロン

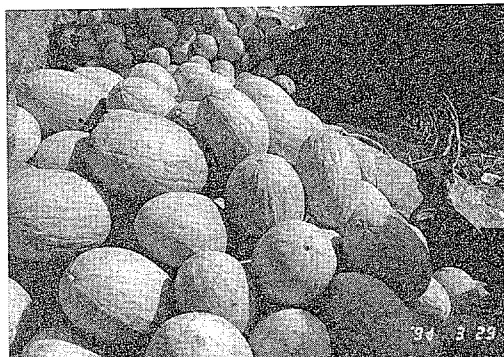


写真14 アジア型 メロン



写真15 中央アジア型 メロン



写真16 店頭の商品

3) 香辛料

パキスタンの料理には多様な香辛料が使用されている。香辛料は単品としても売られているが(写真16)、香辛料店であれこれ指示して混合した物を買っているのも見掛ける。カレー味の料理が多いが、これも含めてかなりのトウガラシが使われ、辛い料理が多い。

4) 莢ダイコン

東南アジアから西南アジアにかけての諸地方ではダイコンの若莢を食べる習慣がある。ダイコンの風味があり、中には僅かに辛味のあるものもみられる。収穫適期が短く、収穫が遅れると繊維ばかりになってしまう。普通のダイコンの莢も用いられるが、インド西南部から、パキスタン東南部にかけては莢専用のダイコンがある。中には莢長50~60cmに達するものもある。

5) 葉根菜類

キャベツ類 (ホワイト・レッドキャベツ、カリフラワー、写真17、18)、ハウレンソウ (アジア型、写真19)、菜類 (ツケナ類、タカナ類)、プルピエール (食用スベリヒユ)、セルリー、パセリー、フェネル、レタス (バター型、リーフ型)、カボチャの蔓先など

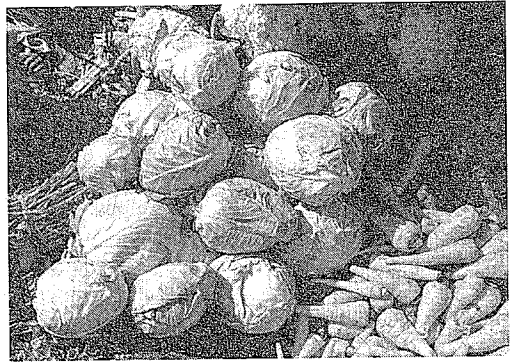


写真17 ホワイトキャベツ

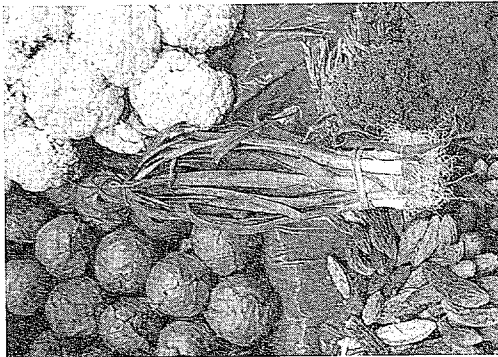


写真18 レッドキャベツとカリフラワー



写真19 ハウレンソウ

6) 根菜類

先述したダイコン、ニンジンのほか、カブの品種が多様であった (写真20)。根菜といえるかどうか問題であるが、タマネギ (写真21)、ニンニク、エシャロットも多い。ごく限られているがレンコン (写真22)、サトイモ (写真23) も見られた。

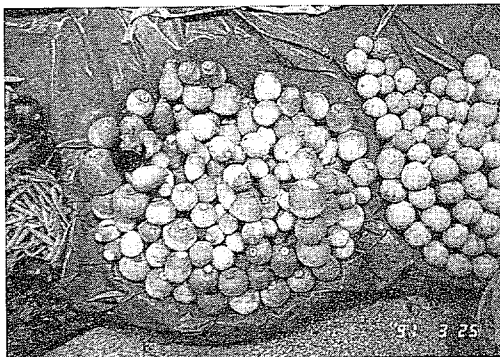


写真20 カブ

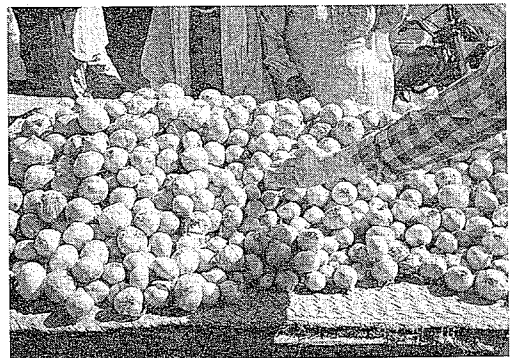


写真21 タマネギ



写真22 レンコン



写真23 サトイモ

7) 果菜類

ウリ科では先述のメロンのほかスイカ、カボチャ（主として*Cucurbita moschata*、一部に*C. maxima*）、キュウリ、ニガウリ（写真24）などがある。ナス科ではトマト、ナス、ピーマン（写真25）が豊富であり、先述の通り、香辛料としてのトウガラシも多様である。ナスは蒂が緑色のヨーロッパ型であった。マメ類としては実エンドウが各地で、多量に見られた。

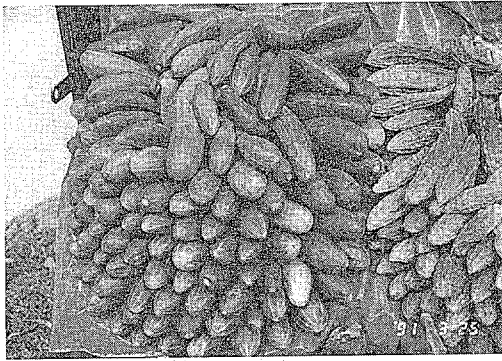


写真24 キュウリとニガウリ

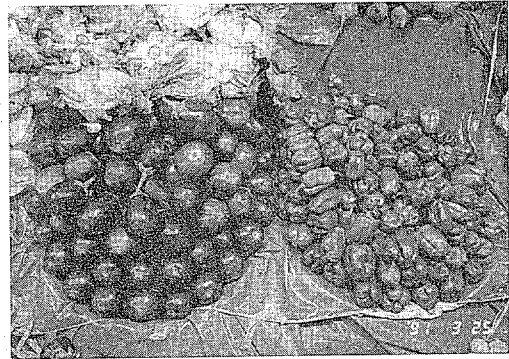


写真25 ナスとピーマン

海外農林業開発協力促進事業 ▶▶▶

社団法人海外農業開発協会は昭和50年4月、我が国の開発途上国等における農業の開発協力を寄与することを目的として、農林水産省・外務省の認可により設立されました。

以来、当協会は、民間企業、政府および政府機関に協力し、情報の収集・分析、調査・研究、事業計画の策定、研修員の受入れなどの事業を積極的に進めております。

海外農林業開発協力促進事業とは

多くの開発途上国は、農林業が重要な経済基盤の一つを占める構造になっていることから、我が国の民間に対しても、同分野への積極的な協力が内外から期待されております。当協会では経済的自立に必要な民間部門の発展を促すうえで、政府間ベースの開発援助に加え我が国民間ベースによる農林業開発協力の推進も欠かせないとの見地から、昭和62年度より農林水産省の補助事業として「海外農林業開発協力促進事業」を実施しております。

当補助事業は今日までの実施の過程で、開発途上国における農林産物の需要の多様化、高度化などを背景とする協力ニーズの変化および円滑な情報管理・提供に対応するための拡充を行い、現在は次の3部門を柱としております。

1. 優良案件発掘・形成事業(個別案件の形成)

農林業開発ニーズなどが認められる開発途上国に事業計画、経営計画、栽培などの各分野の専門家で構成される調査団を派遣して技術的・経済的視点から開発事業の実施可能性を検討し、民間企業などによる農林業開発協力事業の発掘・形成を促進します。

民間ベースの開発途上国における農林業開発協力事業の企画・立案に関して、対象国の農林業開発、地域開発、外貨獲得、雇用創出、技術移転などの推進に寄与すると期待される場合、有望作物・適地の選定、事業計画の策定などに必要な現地調査を行います。

相談窓口 ▶▶▶

民間ベースの農林業投資を支援

2. 地域別民間農林業協力重点分野検討基礎調査事業(基礎調査およびセミナー)

農林業投資の可能性が高いと見込まれる地域に調査団を派遣して、当該地域の農林業事情、投資環境、社会経済情勢を把握・検討し、検討結果に基づく農林業開発協力の重点分野をセミナーなどを通じて民間企業に提示します。

セミナーでは、農林業投資を検討する上で必要となる基礎的情報とともに、現地政府関係機関および業界各方面から提出された合弁等希望案件を紹介します。

これまでに、①インドネシア、②ベトナム、③中国揚子江中下流域(上海市、浙江省、江蘇省、湖北省、安徽省)、④中国渤海湾沿岸地域(北京市、天津市、遼寧省、河北省、山東省)、⑤中国揚子江上流域(四川省)、⑥中国南部地域(雲南省、広西壮族自治区)、⑦中国北部地域(内蒙古自治区、寧夏回族自治区、甘肅省、新疆ウイグル自治区)、⑧中国中部地域(山西省、河南省、陝西省)、⑨チリ、⑩ラオス、⑪カンボジア⑫フィリピンを対象にセミナーを開催しました。

3. 海外農林業投資円滑化事業(企業参加型調査、地球規模問題対応型調査および情報提供)

海外事業経験の少ない企業などが参加した調査団を開発途上国へ派遣し、農林業の開発ニーズ・生産環境などを把握します。民間セクターでの実施が望まれる地球規模問題にかかわる事業への投資を促進するため、現地調査を実施し、関連情報の収集・分析を行います。

【企業参加型調査】 業界団体、企業などの要望に沿った現地調査を企画・立案し、協会職員が同行します。現地調査では、現地側の企業ニーズ、投資機関などの開発ニーズの把握と事業候補地の調査、現地関係者との意見交換などを行います。参加企業は、実費(航空賃、宿泊費、食費など)の負担が必要です。

【地球規模問題対応型調査】 21世紀の地球がかかえる食料・環境・エネルギーにかかわる農林業関連事業への民間投資促進の観点から、酸性土壌、塩類・アルカリ土壌、泥炭土壌の改良による食料増産、未利用植物資源の活用・飼料化、アグロフォレストリー、環境保全植林、バイオマスエネルギー生産などに関する基礎的情報を収集します。

これら調査の結果概要などの投資関連情報は、情報誌「海外農業投資の眼」に掲載します。

(社)海外農業開発協会
第一事業部
TEL 03-3478-3509

農林水産省
国際協力課企画班
TEL 03-3502-8111 (内線 6783)

最高の品質と優れた開発力で
コーンインダストリーをリードする
澱粉と糖質の総合メーカー

製造品目

コーンスターチ	コーンステーパーリカー
ワキンスターチ	コーンシラップ(酵素、酸)
各種化工澱粉	結晶ぶどう糖(無水、含水)
グルーテンミール	液状ぶどう糖
グルーテンフィード	異性化液糖
コーンオイル	ハイマルトースシラップ
各種オリゴ糖(ゲントース、フジオリゴ、バイオトース)	
各種シクロデキストリン	
(結晶 $\alpha/\beta/\gamma$ -CD、液状CD、CD誘導体)	
セルファー(コーンダイエタリーファイバー)	
セルエース(水溶性コーンファイバー)	
ペプチーノ(コーンペプチド)	
輸液用糖質(局方ブドウ糖、局方マルトース)	



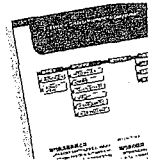
日本食品化工株式会社

本店：〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-33-8(サウスゲート新宿ビル3階) ☎(03)5360-4417
支店：大阪(06)375-3292 名古屋(052)561-3331
工場：富士(0545)52-3781 水島(086)475-1010/研究所：富士(0545)53-5995

海外農業開発 第274号 2004.7.15

発行人 社団法人 海外農業開発協会 仁科雅夫 編集人 小林一彦
〒107-0052 東京都港区赤坂8-10-32 アジア会館
TEL (03) 3478-3508 FAX (03) 3401-6048
定価 300円 年間講読料 1,400円 送料込

印刷所 日本印刷㈱ (3833) 6971



これならわかる！
日本の援助の「基礎の基礎」を解説

開発途上国で活躍する専門家のために開発された、日本の国際協力を理解するための解説書。国際協力の仕組みを制度ごとにわかりやすく解説しているので、専門家だけでなく、入門者にもおすすめです。
英文も並記されているので、現地でのプレゼンにも役立つこと間違いなし！
必要なところだけを取り出せるバンダー形式になっています。

Essential Guide to International Cooperation

国際協力の基礎知識

途上国援助用語

収録語数
約800語

ODA(政府開発援助)や、NGOの途上国援助活動に直接携わる専門家をはじめ、国際協力に関心をもつ人々にまで幅広く役立つように編集された用語集。援助スキーム、開発問題、開発理論などの用語を掲載したほか、巻末には援助関係組織の解説をはじめ、国内外の援助関連機関・NGOの住所、ホームページアドレスなどの情報も満載した必携の書。

Terms for International Cooperation

第2版

国際協力用語集

【付録】●開発途上国の援助関係組織 ●年表 ●援助関連機関のリスト

- B6判/270頁
- 定価(本体3,000円+税)送料別
- ISBN4-87539-048-3 C0530

- 監修：国際協力事業団
- B5判、加除式/90頁
- 定価(本体3,524円+税)送料別
- ISBN4-87539-057-2 C3030

申込先

株式会社 国際開発ジャーナル社

<http://www.idj.co.jp>

〒107-0052 東京都港区赤坂2-13-19 多聞堂ビル
TEL 03-3584-2191 FAX 03-3582-5745

申込書	国際協力用語集	部	国際協力の基礎知識	部
	ふりがな 氏名		社名 所属	
	住所		TEL	

IDJ

海外農業開発

第 274 号

第 3 種郵便物認可 平成16年 7 月15日発行

MONTHLY BULLETIN OVERSEAS AGRICULTURAL DEVELOPMENT NEWS